

学部長挨拶

■ 研究における PDCA サイクルについて



徳島大学薬学部長

大高 章

Akira Otaka

薬学部長の二期四年にわたる任期もほぼ終わりを迎えようとしています。この間、学部運営に関して多くの皆様方のご協力をいただきましたこと、この紙面を通して御礼申し上げます。任期最後の巻頭言として皆様にお伝えしたいことは多々ありますが、今回は薬学部において研究に携っておられる教員そして学生の皆さんにメッセージをお伝えしたいと思います。

昨今、大学においてもPDCAサイクルという言葉をよく耳にします。Plan（計画）－ Do（実行）－ Check（評価）－ Act（改善）を繰り返すことで、業務の質や成果を高めていく手法です。大学における業務は、主に運営、教育、研究の3つから成り立っていますが、今回は研究におけるPDCAサイクルについて、すでに実践されておられる方も多いと思いますが、私が日頃から心がけていることを述べさせていただきます。研究計画を

立てずに、研究をいきなり始める人はいないと思います。研究を行う以上、PとDは常に考えられています。問題はCheck（評価）とAct（改善）を適切に実施し、螺旋階段を昇るがごとくPDCAサイクルをまわし、研究の質を向上できているかだと考えます。それでは、PとDに続くCheck（研究評価）手法としてどのようなものが有効でしょうか。研究に携った人たちによる論議、学会発表などを通じた外部研究者との論議、原著論文の投稿時における審査意見とこれを踏まえた論文発表、いずれも重要です。なかでも原著論文の発表がもっとも効果の高いCheck方法だと思います。まず、原著論文の発表には、必然的に二つの前に挙げた研究グループ内そして外部研究者との論議が含まれます。また、原著論文はほとんどの場合英文で発表されますが、ここでは研究背景の正確な把握、適切な実験計画の提示、実験結果の説明とこれを基盤とした考察、これらを論理的かつ簡潔に他の多くの研究者に英文で伝えることが不可欠です。原著論文を発表することの良い点は、その執筆を通して、Plan（計画）やDo（実行）が適切であったかを振り返る機会が得られること、またこの振り返りからAct（改善）に繋げることが出来ることです。それでは研究の質を向上させるために、PDCAサイクルをまわそう！研究結果がすべて出たら論文の執筆に取り掛かろう！実はこれでは研究におけるPDCAサイク

ルは有効にはまわらないと思っています。研究を開始して、データが少し出始めたあたりから論文執筆に取り掛かるべきです。時には書いたことが無駄に終わることもありますが、英文作成の練習と思えばよいことです。研究遂行と平行して論文執筆を行えば、当初は予想していなかった研究遂行上の問題点や追加して取り組むべきことが次々に見えてきます。これは正にAct（改善）そのものであり、研究の質そして研究力向上に向けたPDCAサイクルの要は、Do（実行）と同時平行的にCheck（評価）である論文作成を進め、Act（改善）に結びつけることにあります。研究の質向上は、研究者自身の将来に好影響を与えるだけでなく、必ず科研費などの外部資金獲得件数そして大学学部の収入上昇に繋がります。これは大学学部運営のみならず教育にも好影響をもたらします。政府からの大学運営のための運営交付金は毎年減額が続いています。この状況の打破を目指して種々の施策が考えられていますが、徳島大学内において研究に関し高い評価を得ている薬学部の取る道の一つは、更なる研究力向上に向けた研究における効率的なPDCAサイクルの実践と考えています。本巻頭言が、薬学部に集う皆様の研究におけるPDCAサイクルが適切にまわっているかを考える機会提供の一助となれば幸いです。

後輩へのメッセージ

■ 地域を支える薬剤師の夢と未来



鳴門山上病院 診療協力部長・薬剤科長

賀勢 泰子

Yasuko Kase

徳 島大学薬学部の後輩の皆さまへ贈るメッセージの執筆依頼を戴いて、どんなメッセージをお届けすれば良いかと考えつつ振り返ってみました。1970年代に卒業いたしましたので、ひとこと後輩といっても本当に幅広い世代の方々がおられます。白髪も増えるはずと納得した次第ですが、近年の薬剤師を取り巻く社会環境をふまえて未来に思いを馳せてみたいと思います。

この四半世紀を思い起こしても、先人のたゆまぬ研鑽と努力によって、薬剤師の業務は量も質も格段に拡大して参りました。薬学教育制度も薬剤師を取り巻く社会環境も大きく変化し、これから迎えるであろう少子高齢社会に対応するため、保健福祉制度や地域の医療提供体制もドラスティックに変化しています。同時に薬剤師の担う役割も多様化し、病院薬剤師は、チーム医療の一員として医師や看護師等の専門職と共に医療安全と医療の質を高めるため欠くことのできない専門職として、保険薬剤師はかかりつけ薬剤師として地域の患者さんの薬物療法と生活支援を担う専門職として期待されてい

ます。地域の患者さんやご家族を支える仕組みが整ってきたことは、本当に喜ばしいことと感じていますが同時に責任の重さも深く胸に刻んでいます。

薬剤師の夢と未来

さて、今、薬学を学んでいるみなさま、薬剤師として日々活躍されておられる先生方は、どんな夢を持たれているのでしょうか。きっと、患者さんの病気を治す手助けをしたい、治療薬の研究開発に取り組みたい、薬学教育や行政に携わりたいなど様々な夢を持っておられると思います。どんな未来を描いていても薬学を学びその専門性を生涯にわたって高め続けること、薬物療法を通じて患者を治癒に導くことはもちろん、常に患者さんやご家族の想いに共感し生活者として捉える視点を忘れてはならないと感じています。

出生から小児、青年期、壮年期を経て高齢者まで、短期的なかかわりで治癒に至る場合もあれば、長期にわたる慢性疾患や、疾病による障害を受容し長期に付き合っていかなければならない場合、どんな治療も無効で治癒がかなわない場合、尊厳ある生を支えるための緩和的ケアが必要な場合、いろいろな状況があります。どんな時も常に生活を基盤として患者さんやご家族の心に寄り添い支えるために最善の方法は何か、という視点を忘れずに最善のケアを提供できる資質が求められています。

これからの少子高齢社会では、「病院完結型医療」から「地域完結型医療」への改革、『治癒する医療』から『治

し、支える医療』へシフトし、必要な医療を切れなく提供できる体制を地域全体で整備し、住み慣れた地域で、自分らしい生活を送りながら尊厳ある生を全うすることができる社会の実現が求められています。

「専門性を極めるか?」、「ジェネラリストであるべきか?」 普遍的な問として常に模索していますが、地域医療においては専門性を高める一方で、ジェネラリストの資質が問われる時代になってきていると痛感する日々でもあります。

同時に、人生においては、どんな状況にあっても、未来は自分自身で描き作り上げるもの、どんな時も自分の可能性と未来を信じて夢と希望を持ち続けることで多くの支援を得て人生をも変えていくことができる。そんな思いを強くしています。

これからの日本は少子高齢社会に向かってまいりますが、地域医療を支える薬剤師には、チーム医療の一員として夢と希望を持って地域医療に関わり、地域の患者さんやご家族に、『薬剤師さんに支えてもらってよかった』『この地域に生きてきて良かった』と思いを共有できるよう、皆さまと共に歩んで参りたいと心から願っています。



国際交流

■ スマトラ・ウタラ大学薬学部との学術交流協定締結



蛋白質発現分野 教授

篠原 康雄

Yasuo Shinohara

→ のたび徳島大学薬学部とインドネシアのスマトラ・ウタラ大学薬学部の間で学部間学術交流協定が締結されることになり、平成28年5月24日、先方から Masfria Binti Mustafa Kemel 薬学部長、Hakim Bangun 教授ほか2名の教員が徳島大学薬学部を訪問され、協定を交わしました。今般の交流協定締結は、来学された Bangun 教授の強い希望によるもので

した。Bangun 教授は、昭和62年に徳島大学大学院薬学研究科に博士後期課程が設置された際に、国費留学生として来日、大学院に入学、薬学博士の学位を取得された研究者です。学位を取得された後、帰国され、母校であるスマトラ・ウタラ大学薬学部の教員となり、平成11年からは教授として活躍されておられます。母校の教育研究の質の更なる向上のために、本学薬学部との学術交流を熱望されておりましたが、当時の指導教員がすでに退職されておられたこともあり、なかなか話が前に進みませんでした。このたび、大高学部長のご理解、ご支援のもと、大学院で Bangun 教授と同期だった篠原がお手伝いする形で話が進められました。当日は徳島大学

薬学部を代表して佐野評議員が協定を交わしました。当時は学部学生でしたが、大学院生時代の Bangun 教授のことを覚えておられた小暮教授も出席下さり、学術交流協定締結のセレモニー、野地澄晴学長への表敬訪問や懇親会と楽しい交流のひとつを過ごしました。今後、両薬学部の間で活発な学術交流が行われるようになることを楽しみにしています。



薬学部長室にて調印式

左から、小暮教授、篠原教授、Masfria 薬学部長、佐野評議員、Bangun 教授、Anayanti Arianto 准教授、Nazliniwaty Muhammad Taat 副学部長

■ 東國大学校薬学大学よりお二人の Lee 先生をお迎えして（その2）



分子創薬化学分野 教授

佐野 茂樹

Shigeki Sano

本年度も大韓民国の東國大学校薬学大学（College of Pharmacy, Dongguk University）から、2名の教員（Prof. Kyeong Lee と Prof. Moo-Yeol Lee）が徳島大学薬学部を訪問されました。少々ややこしいのですが、東國大学校薬学大学にご在籍の

4名の Lee 先生がこの2年間で全員徳島へ来られたこととなります。平成28年8月23日（火）、猛暑の中、両先生には日本薬学会中国四国支部主催の特別講演会にてご講演いただきました。加えて、大高学部長との意見交換や薬学部の施設見学、薬学部教員との懇親会、藍染工場での見学・藍染体験など、二泊三日の徳島滞在をお楽しみいただけたご様子でした。両部局は学術研究及び教育上の交流を推進するため、平成24年12月に学術交流協定を締結し、以来教員の相互訪問を重ねています。次回、土屋浩一郎教授と佐藤陽一准教授が訪韓（平成28年12月）されますと、

合わせて23名の教員（東國大学校薬学大学教員12名、徳島大学薬学部教員11名）が本協定に基づいて招聘・派遣されたこととなります。今後も地道な交流活動により相互理解を深め、両部局間ひいては両国間の関係強化・拡充に少しでも貢献できればと願っております。



Moo-Yeol Lee 先生（左）と Kyeong Lee 先生（右）

国際交流

Telethon Institute of Genetics and Medicine (TIGEM) との国際共同研究



創薬生命工学分野 助教

辻 大輔

Daisuke Tsuji

私は平成27年度の科学研究費助成事業・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）に採択され、2016年5月より約3ヶ月間、イタリア・ナポリにある Telethon Institute of Genetics and Medicine (TIGEM) に行き、共同研究を進めてまいりました。

ナポリはイタリア第三の都市で、「ナポリを見てから死ぬ」という有名な諺があるように、美しい海に燦々と輝く太陽が降り注ぐ風光明媚な土地です。また、人々は陽気で、温暖な気候とピッツアやパスタなどの美味しい食事にも恵まれています。

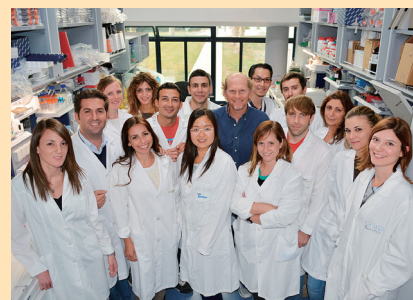
私の研究対象であるリソソーム蓄積症をはじめとする遺伝性疾患の基礎研究や治療法開発などは、公的機関や民間組織からの投資が不十分ですが、TIGEM は慈善基金団体であるイタリアの Telethon 財団（創始者はフィアット社の創業家の方で、現在はフェラーリやイタリア国営放送 Rai TV 等がバックアップしております）からこれらの研究のための支援を受けて設立された特徴的な研究所であります。外国人研究者の受入も多く、フランスやスペインなどのヨーロッパ各国、アルゼンチン・チリなどの南アメリカそしてインド・中国などのアジアから若手研



ナポリの街並

究者が集まっております。

共同研究者の Andrea Ballabio 所長のラボでは、システムバイオロジーの技術を駆使して発見したリソソームの生合成のマスター遺伝子である Transcription Factor EB (TFEB) と呼ばれる転写因子に着目して様々な遺伝子疾患における役割や治療への応用を行っております。2013年より共同研究を進めており、私は中枢神経症状を呈するリソソーム蓄積症の病態における TFEB の役割を調べ、神経炎症に関与していることを明らかにしました。今回の3ヶ月では、これまでの研究を発展させるために、リソソーム病モデルマウスと TFEB のコンディショナル KO マウスとの交配により、脳特異的に TFEB を KO するリソソーム病モデルマウスの構築とその病態解析を行いました。その結果、リソソーム酵素と TFEB のダブル KO により、神経細胞死が増加しており、さらに神経炎症が強くなることがわかりました。またオートファゴソームマーカーである LC3が蓄積しており、オートファジーに異常が起きていることも明らかになりました。このことから、リソソーム病において TFEB はリソソームの生合成を促すことでオートファジー経路を活性化し、神経保護的に働いていると考えられます。これらの成果については、2016年の7月に本学で開催されました国際シンポジウム「徳島とイタリアをつなぐ脳科学研究の潮



TIGEM Ballbio Lab. のメンバー

流」で報告させていただきました。今後は TFEB の脳特異的 KO を起こしたマウスの解析に関する国際共同研究を TIGEM と進め、神経変性と TFEB を介したリソソーム-オートファジー系に関する研究を発展させていきたいと考えております。

最後になりますが、今回の共同研究に関してご尽力頂きました伊藤孝司教授をはじめ薬学部の先生方、また Ballabio 所長をはじめとする TIGEM のメンバー、そして国際シンポジウムでの貴重な発表の機会を下さった笠原二郎准教授にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。



TIGEM メンバーとの飲み会



国際シンポジウム後の飲み会

フォーラム

臨床薬学教育フォーラム



臨床薬学実務教育学分野 教授

川添和義

Kazuyoshi Kawazoe

臨床薬学実務教育室は平成28年4月より臨床薬学実務教育学分野として医歯薬学研究部の一分野となり、学部と共に大学院教育を担う研究室となりました。これを記念してグラウンドパレス徳島にて去る7月24日に、臨床薬学実務教育学分野の企画で臨床

薬学教育をメインテーマとした『臨床薬学教育フォーラム』を開催しました。演者として、前京都薬科大学学長の乾賢一京都大学名誉教授ならびに慶応大学薬学部の鈴木小夜専任講師をお招きしてご講演いただき、2時間にわたって教育、研究、実務の観点から臨床薬学を俯瞰し考える機会としました。乾先生は京大病院の薬剤部長を長年にわたり経験されており、教育・研究と実務の実体験を踏まえた貴重なお話は、大学教員や現役の薬剤師に対して今後の在り方を示唆していただくものでした。また、実務経験をベースに研究者としても活躍されている鈴木先生からは、これからの薬学を担う学生のみならず実務教育を担当する教員にとっても参考になるお話をいただきました。フォーラムには教員、学生の他、現役



臨床薬学教育フォーラム講演

の薬剤師の方々を含めて合計93名にご参加いただき、たいへん盛況裏に終えることができました。また、講演後は実際に実務実習に当たっていただいている指導薬剤師の先生や徳島県薬剤師会・病院薬剤師会理事の先生方と徳島大学薬学部教員との意見交換会を行いました。これまで、大学教員と薬剤師とが会って話をする場があまりなかったのですが、これを機会に今後はさらに活発に大学と地域との間で交流できることを期待しています。

ひらめき☆ときめきサイエンス



臨床薬学実務教育学分野 助教

阿部真治

Shinji Abe

平成28年8月に高校生を対象とした創薬・薬剤師体験実習として、独立行政法人日本学術振興会研究成果の社会還元・普及事業である「ひらめき☆ときめきサイエンス」を2プログラム開催いたしました。

8月18・19日は創薬体験「天然甘味のサイエンス（分子の受容体の“あまい”ときめき）」を開催し、実施代

表者の柏田良樹教授をはじめ田中直伸准教授、植野哲准教授、大井高准教授、北池秀次技術専門職員が担当いたしました。県内外からのべ22人の参加者があり、甘味植物から甘味成分の抽出と分離を行う実験や、天然甘味成分と構造、味覚の感じ方に関する講義、施設見学、質疑応答・自由討論を行いました。また、8月22・23日には薬剤師体験「臨床研究事件簿（～薬学的知識と実験を駆使して臨床現場の謎を解明せよ～）」を実施代表者の阿部真治をはじめ川添和義教授、佐藤智恵美助教、岡田直人助教、北池秀次技術専門職員が担当して開催しました。こちらのプログラムは県内外からのべ34人の参加者があり、調剤体験、薬物を混合したときの変化についての実験などを行いました。いずれのプログラムでも参加者の皆さんから「研究に興味をもった」、「薬剤師の仕事へのイメージ

高校生対象創薬・薬剤師体験



創薬体験実習



薬剤師体験実習

が変わった」などのポジティブな感想をいただきました。今後も薬学部の特徴を活かした高校生対象のプログラムを展開し、将来の優秀な薬学研究者や薬剤師の育成につなげていきたいと考えています。

新任教員紹介



分子情報薬理学分野 教授

藤野 裕道

Hiromichi Fujino

平成28年6月1日付で分子情報薬理学分野教授を拝命致しました。私は、平成9年に北海道大学大学院薬学研究科にて博士(薬学)の学位を取得、平成10年より7年間、The University of Arizona, College of PharmacyにてResearch Associate, Assistant Research Scientist, Associate Research Scientistとして研究、学生指導に従事致しました。平成17年から千葉大学大学院薬学研究院にて講師、助教授、准教授を務め、この度本学に着任致しました。大学院では、ムスカリン性アセチルコリン受容体が免疫系に与える影響について、そして米国時代から現在までは、癌とプロスタノイド受容体との関係について特にその分子情報機構を中心に、一貫してGタンパク質共役型受容体情報伝達系の解明を進めています。今後の超高齢化社会を迎えるにあたり、プロスタノイド受容体の関与する癌を含む生活習慣病への効果

的な予防法・予防薬、あるいは新しい薬物治療・改善薬の開発に繋げるため、必要かつ有益な情報の提供を目指したい所存です。薬理学の中で重要な、またひとつの代表的な分野である受容体の新たな機能解析の研究と共に、薬物の効果や作用機序、その歴史的背景や社会への影響にも焦点を当てた薬理学教育も展開したいと考えております。また7年間の米国アリゾナ大学での研究指導経験を生かし、国内のみならず国外のライフサイエンスを担う徳島大学薬学部・大学院の卒業・修了生を育成したいと考えています。しっかりとメカニズムも把握した「薬物のエキスパート」である Pharmacist-Scientist、Medicinal-Scientistとして、地域・社会への役割を大切しながら世界に繋がる視点を持ち、他(多)分野の職種とも連携も厭わない新たな分野を自ら開拓する人材育成に貢献できればと考えております。



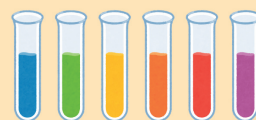
薬品製造化学分野 教授

山田 健一

Kenichi Yamada

平成28年7月1日付で薬品製造化学分野教授に就任いたしました。私は平成8年に東京大学薬学部製薬学科を卒業し、同大学大学院薬学系研究科に進学しました。平成13年に学位を取得後、運良く京都大学大学院薬学研究科で教員として採用していただき、以後15年間、同大学の助手、助教授、准教授として教育研究を行ってまいりました。これまで不斉合成法および有機金属やラジカル種を用いる新反応の開発と生理活性化合物の合成研究に取り組んでまいりました。有機合成化学は薬のより良い供給法の開発を志向する実学であるのと同時に、薬の作用を分子レベルで理解するために不可欠な、分子の特性や分子間相互作用に関する新たな知見が得られる基礎科学でもある点に重要性和魅力を感じております。このたび、徳島大学の名を世界に高らしめた先生のお一人である落合正仁名誉

教授の研究室を引き継ぐこととなり、身の引き締まる思いがいたします。これからも引き続き、高反応性活性種の反応制御と触媒・生理活生物質など機能性分子の設計・合成とを両輪として研究を進める一方で、新たな研究分野にも挑戦してゆきたいと思っております。そして何よりも、講義や研究を通して、学生さんたちと一緒に化学を楽しむことを大切にしたいと思っております。徳島から世界へと羽ばたく優れた卒業生を多数輩出するべく尽力してゆく所存でございますので、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



学生の活躍

University of British Columbia への短期留学



薬物動態制御学分野
大学院薬科学教育部博士前期課程2年

金城 望

Nozomi Kinjo

2016年7月11日から9月29日までの約3ヶ月間、カナダ・バンクーバーにある University of British Columbia (UBC) に短期留学をさせて頂きました。バンクーバーは多様な文化が寛容に混ざり合い、様々な文化に触れることができます。また、自然が豊かで夏は雨も少なく湿度も高くなく、とても過ごしやすい気候であることから「世界で最も住みやすい都市の

一つ」と言われています。

UBC は、約5万人の学生が学ぶカナダ西部最大の州立総合大学であり、研究レベルも極めて高く、常にカナダのトップ3に入る研究大学です。また、全学生の約12%が留学生であり、140以上の国から学生を受け入れており、国際色豊かな雰囲気であり、居心地もよかったです。

受け入れていただいた Shyh-Dar Li 先生の研究室で『クロドロネート封入リポソーム調製に関する検討』と『Cellulo におけるがん細胞スフェロイドに対する毒性評価検討』という2つのテーマで研究を行いました。英語の苦手な私に対しても突き放すことなく簡単な単語に言い換えてくれたり、図で説明してくれたりとコミュニケーションをとってくださいました。英語での研究に関する議論は難しく、なかなか自分の考えを表現することができずに悔しい思いばかりしました。それでも諦めず必死で自分の気持ちを伝えようと食らいつくことで、だんだんとコミュニケーションを図ることができ



UBC 薬学部前にて

るようになっていきました。このことから、一番大切なことは、英語の文法ではなく、如何に相手に自分の意見を伝えるかということだということを感じました。

最後に、今回留学する機会を与えてくださった大高章学部長、南川典昭教授、石田竜弘教授をはじめとする諸先生方や薬物動態制御学分野の研究室メンバーの皆様に、深く御礼申し上げます。



薬学部2年 薬学部軟式テニス部

築瀬 真利

Masatoshi Yanase

薬学部軟式テニス部です。私たちは大学内のテニスコートで週2回の練習を中心に現在は2年生23人、1年生13人の合計36人で活動しています。この薬学部軟式テニス部の

特徴は部員の多さと明るい雰囲気だと思います。部員には小学生のころからの経験者をはじめ、大学に入ってから初めて運動部に入ったという初心者まで様々な個性豊かなメンバーが大勢集まっていて、毎週楽しく練習しています。またイベントなどではOBの方々の参加も多く、先輩後輩の間でも仲良く話したり、テニスをしたりすることができます。優しい先輩方が多く、忙しいときにも時間を作って練習に顔を出してくれる方や丁寧にアドバイスをしてくれる方など、このような優しいOBの方々の支えもあって初心者でも入りやすい良い雰囲気ができています。

この薬学部軟式テニス部の日々の練習の成果を発揮する機会として、部員全員で年に2回の大きな大会に出場しています。この2つの大会はどちらも

関西圏を中心とした薬学部の大学のみが参加する大会で、部員の皆はここで1勝でも多く勝てるよう努力しています。

この部活では、1人、1ペアの部員の試合を全員が応援したり、1つのナイスプレーや勝利を全員で喜んだりと皆で一つのことを目指す楽しさがあると思います。他の大学の部活に比べればお世辞にも強いとは言えないですが、それでも強敵に向かって一丸となるこの部活が私はとても好きです。来年度の夏に私たち2年生の最後の大会があるので今はそれに向けて一生懸命かつ楽しく練習に励んでいます。結果はどうだろうと最高の思い出を作って、最後にこの部活に入ってよかったなと思えるようにしたいです。

サークル紹介

薬学部関連ニュース

教員の異動

平成28年6月1日付採用 分子情報薬理学分野 藤野 裕道 教授
 平成28年7月1日付採用 薬品製造化学分野 山田 健一 教授



学会賞等受賞

【教員の受賞】

■ Postdoctoral Presentation Award

受賞者：清水 太郎 特任助教（総合薬学研究推進学）
 受賞年月日：平成28年8月25日
 表彰団体名：日本薬剤学会 第41回製剤・創剤セミナー
 受賞内容：脾臓辺縁帯B細胞を標的としたワクチンによる新規がん治療法の開発

■ Postdoctoral Presentation Award 2016

受賞者：清水 太郎 特任助教（総合薬学研究推進学）
 受賞年月日：平成28年9月2日
 表彰団体名：第25回 DDS カンファランス
 受賞内容：脾臓辺縁帯B細胞を標的としたリボソームワクチンの開発

■ 若手研究者奨励賞（口頭発表）

受賞者：幾尾 真理子 特任助教（総合薬学研究推進学）
 受賞年月日：平成28年9月3日
 表彰団体名：第8回日本 RNAi 研究会／第3回日本細胞外小胞学会 JSEV
 受賞内容：多発性骨髄腫による Exosome を介した骨分化抑制機構の発見と解析

■ 優秀演題賞

受賞者：岡田 直人 助教（臨床薬学実務教育学）
 受賞年月日：平成28年9月18日
 表彰団体名：日本医療薬学会
 受賞内容：ニボルマブ投与による末梢血リンパ球比率の変化が副作用発現及び治療効果に与える影響

【学生の受賞】（学年は受賞時）

■ 優秀発表賞 Young Investigator Awards

（学会名 European Histamine Research Society 45th Annual Meeting）

- 受賞者：岡本 健太郎（M1）
 受賞内容：Effect of narrow-band UVB on up-regulation of Histamine H1 receptor gene expression
- 受賞者：湧川 朝治（M2）
 受賞内容：TREATMENT WITH ANTIHISTAMINES IN COMBINATION WITH SUPLATAST TOSILATE MARKEDLY ALLEVIATED NASAL SYMPTOMS IN TOLUENE-2,4-DIISOCYANATE-SENSITIZED RATS

受賞年月日：平成28年5月11-14日
 表彰団体名：European Histamine Research Society

■ 第15回四国免疫フォーラム奨励賞

受賞者：山下 ありさ（D2）
 受賞年月日：平成28年6月25日
 表彰団体名：四国免疫フォーラム
 受賞内容：タンパク質凝集体難病の克服に向けた小胞体操作の分子基盤

■ ベストディスカッション賞

受賞者：太田 雅士（B4）
 受賞年月日：平成28年7月1日
 表彰団体名：創薬懇話会2016 in 夢科

■ 支部長賞

受賞者：伊藤 丹（M2）
 受賞年月日：平成28年7月10日
 表彰団体名：日本分析化学会中国四国支部
 受賞内容：紫外吸収スペクトルのフロー測定とケモメトリックスによる二層錠剤の溶出挙動の評価

■ 徳島新聞生命科学分野研究支援金

受賞者：岡野 裕貴（M1）
 受賞年月日：平成28年7月19日
 表彰団体名：公益財団法人 徳島新聞社会文化事業団

■ Poster Prize

受賞者：大塚 裕太（D2）
 受賞年月日：平成28年8月25日
 表彰団体名：China-Japan-Korea Symposium on Analytical Chemistry, 2016
 受賞内容：Investigation on carbamazepine polymorphic transformation kinetics with attenuated total reflectance -infrared spectra and multivariate curve resolution -alternating least squares analysis

■ 若手優秀ポスター賞

受賞者：住友 琢哉（B4）
 受賞年月日：平成28年11月5日
 表彰団体名：第53回フローインジェクション分析講演会
 受賞内容：内標準-振幅変調多重化フロー分析法の開発と Fe²⁺ 定量による検証

発行：徳島大学
 編集：薬学部広報委員会
 広報委員：滝口祥令、難波康祐、植野 哲
 佐藤陽一、阿部真治、北池秀次

URL：http://www.tokushima-u.ac.jp/ph
 〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1
 徳島大学蔵本事務部薬学部事務課総務係
 E-mail：isysoumu3k@tokushima-u.ac.jp

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募くださいますようお願いいたします。次回の発行は、平成29年の6月頃を予定しております。